

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第97集

大脇城遺跡Ⅱ

2001

財団法人愛知県教育サービスセンター
愛知県埋蔵文化財センター

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第97集

おお わき じょう
大脇城遺跡 II

2001

財団法人愛知県教育サービスセンター
愛知県埋蔵文化財センター

序

愛知県豊明市は、愛知県の中央部に位置します。承知のように、現在では名古屋市のベッドタウンとして発展を続けていますが、この街には歴史的にも多くの文化財が知られており、古くから繁栄した場所でもあります。

このたび、財愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センターでは、第二東海自動車道建設に伴う、大脳城遺跡の発掘調査を、日本道路公団から愛知県教育委員会を通じて実施致しました。その結果、先人の生活・文化に関するいくつかの知見を得ることができました。そして、今回これらをまとめ、報告書として刊行するにいたしました。本書が歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財に関するご理解を深める一助となれば幸いに存じます。

なお、文末で恐縮ではありますが、発掘調査の実施に当たりましては、地元住民の方々を始め関係諸機関及び関係者から、多大なご指導とご協力をいただいております。深く感謝を申し上げます。次第であります。

平成 17年 8月

財愛知県教育サービスセンター

理事長 久留宮 泰啓

例言

1. 本書は愛知県豊明市栄町に所在する大脇城遺跡(『愛知県遺跡地図』()尾張地区による遺跡番号は12068)の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、第二東海自動車道建設に先立つもので、愛知県教育委員会を通じて委託を受けた愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 調査期間は平成17年1月に実施した250㎡の範囲確認調査を皮切りとし、本調査は平成10年4月に750㎡を実施した。担当者は、平成10年度が、福岡晃彦(本センター課長補佐、現横須賀高等学校)川添和暎(本センター調査研究員)、平成17年度が、木下一(本センター主査、現西尾市立鶴城中学校教諭)竹内 睦(本センター調査研究員、現主査)池本正明(本センター調査研究員、現主任)である。
4. 調査に際しては、次の機関から指導・協力を受けた。
愛知県教育委員会文化財課(現生涯学習課文化財保護室) 愛知県埋蔵文化財調査センター、豊明市教育委員会
5. 発掘調査は鈴木智恵(本センター発掘補助員)を始め、以下の方々の参加を得た。
秋山 猛、小川元子、小堀悦子、加賀勝美、勝木悦子、中村玲子、浜島喜代美、深谷 勝、三浦のり子、三輪森彦、渡辺喜代子(五十音順・敬称略)
6. 本書をまとめるにあたっては、以下の方々にご教示、ご協力を得た。
天野暢保、内田智久、神谷友和、加納俊介、川崎みどり、北村和宏、山本直人(五十音順・敬称略)
7. 本書で使用する色調名は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帳』に依拠した。
8. 調査区の座標は、建設省告示の平面直角座標Ⅱ系に準拠し、海拔標高はT P(東京湾平均海面高度)による。
9. 本書の編集は池本が担当し、執筆は池本の他に第 2章を竹内が、第 3章は森 勇一氏(愛知県立明和高等学校教諭)の手による。なお、図版のトレースは河合明美(本センター調査研究補助員)も加わった。
10. 調査に関する記録は、本センターが保管している。
11. 出土遺物は、愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。

目 次

第 章 はじめに	1
1 経緯と経過	1
2 環境と周辺の遺跡	2
第 章 遺 跡	4
1 層 序	4
2 遺 構	6
第 章 遺 物	10
第 章 まとめ	11
第 章 付 載	13

参考・引用文献

付 表

遺構計測一覧

遺物計測一覧



挿図・図版目次

第 1図 調査進行表	1
第 2図 周辺の主要遺跡	3
第 3図 調査区南壁層序	4
第 4図 遺構図	5
第 5図 東部集中域	6
第 6図 西部集中域	8
第 7図 遺物実測図	10
第 8図 調査区航空写真	11
第 9図 調査地区全体図	12

図版 1 調査区全景 西部集中域

図版 2 遺 物



この地図は国土地理院発行の
20万分の1地勢図「名古屋」
「豊橋」を使用したものである。

第 章 はじめに

1 経緯と経過

建設省（現国土交通省）では、名古屋市郊外の交通量調整を目的に、第二東海自動車道
経緯
を計画した。この計画路線には大脇城遺跡が所在しており、愛知県教育委員会が建設省
とその取り扱いを巡って協議した。その結果、これらの遺跡を記録として保存する方向で
まとめられ、建設省及び日本道路公団から愛知県教育委員会を通して委託を受けた、愛知
県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した。

調査は、二次にわたって計画された。このうち、一次調査は面積 10000㎡がその対象と
経過
された。作業は、平成 8～9 年度に完了し、すでにその報告書も刊行されている（北村
1999）。二次調査は平成 11 年 1 月に範囲確認調査（250㎡）を実施した後、面積 750㎡を対
象とした。作業は平成 11 年 4 月～5 月に実施されたもので、本書がその報告書に該当する。

今回の調査方法は、地表面から表土のみをバック・ホウにより除去し、建設省告示によっ
て定められた平面直角座標第Ⅱ系に準拠したグリッドを基準として、手掘りで包含層を掘
削して遺構を検出する方法をとった。なお、遺構測量はヘリコプターによる航空写真測量
で、調査区全体の基本平面図（1/50）を作成し、さらに重要部分は手測りによる補助測
量図をこれに加えている。

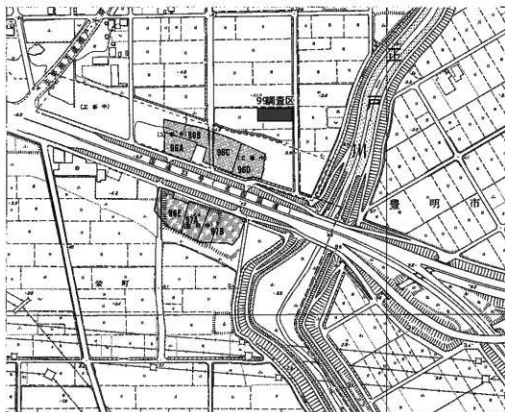


図1 調査区位置図（1/5000）

2 環境と周辺の遺跡

位置 大脳城遺跡は、愛知県豊明市栄町字大脳（北緯 35 2 16、東経 137 0 21）に所在する。南には大府市が、東は旧尾張国と三河国の国境を流れる境川を挟み刈谷市が隣接している。遺跡の標高は 350m 前後を測り、周辺に丘陵地が存在しているにもかかわらず、境川の一支流である正戸川右岸の平坦な沖積地に立地しているのが特徴である。後世の開墾・耕地整理等により周辺は水田化し、昭和 44 年には国道 23 号線（名四国道）が建設され、周辺の景観は一変した。平成 7 年から 8 年にかけて本センターが調査した結果、大脳城の様相が明らかになってきた。

歴史的環境 次に周辺の歴史的環境を年代順に概観する。

旧石器時代の遺跡については例数が少なく、北北東、約 5km に若王子遺跡が確認されるのみである。縄文時代になると南方の境川左岸には茅川遺跡・八王子神社貝塚・築地貝塚等が点在するが、大脳城遺跡周辺の右岸には縄文時代の遺跡は少なく、豊明市内においては、今日まで縄文土器の出土例はない。弥生時代においても、境川右岸には、北北東約 4.8km に坊主山遺跡（後期 山中期）が、南南東約 3.3km に惣作遺跡（中期 高蔵期）が認められる程度である。古墳時代においては、境川流域全体を見渡しても遺跡が少なく、豊明市内では若王子遺跡があげられるのみである。この時期における人々の活動が低調であったと推測される。

奈良・平安時代の集落遺跡は少なく、若王子遺跡・惣作遺跡等で遺物の出土が確認される程度である。しかし、丘陵地において奈良時代に始まった須恵器の窯業生産は、平安・鎌倉時代に引き継がれ、猿投山西南麓古窯群の一部を形成することになる。鎌倉・室町時代の集落遺跡については賢聖院貝塚・惣作遺跡等少ないが、「沓掛郷」「横根郷」等が「熊野参詣良尊法院引導之檀那之在所事」（応永 16 年 1409 熊野那智大社所蔵『米良文書』）にみられ、今後の調査に期待がもたれる。

大脳城 戦国時代に入ると、数多くの城館が境川流域に築かれている。境川右岸の尾張側には緒川城、横根城、大脳城、沓掛城等、境川左岸の三河側には、刈谷城等が存在する。大脳城の城主としては、「梶川五左衛門」が伝えられている。梶川五左衛門は、緒川城、刈谷城を居城とした戦国大名の水野氏に属したとされ、『寛文村々覚書』によれば 1670 年代には、「先年梶川五左衛門居城之由、今八畑成」という状況であったと記されている。梶川五左衛門は大脳城から横根城（大府市）へ、さらに成岩城（半田市）に移ったとも伝えられている（『尾陽雜記』）。また、豊明市内の沓掛城は今川義元が京都へ進出しようとした際に駐軍した城としても有名で、その際、義元が敗死したとされる桶狭間古戦場伝説地は大脳城の北西 3km の地点にある。

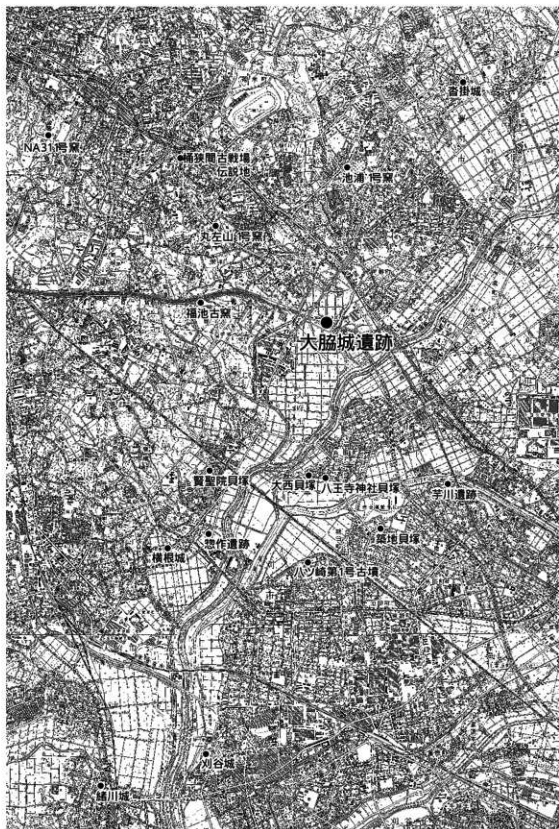


図2 周辺の主要遺跡 (150 000)

この地図は国土地理院 2万 5分の 1地形図「鳴海」、「知立」、「刈谷」、「安城」を使用したものである。
 財 愛知県教育委員会『愛知県遺跡地図()』1994・『愛知県遺跡地図()』1995

第 章 遺 跡

1 層 序

今回の調査区は、調査開始直前まで水田として利用されていた。地表面の標高は、3.6m程度。ほぼ平坦な地形であるが、東側にむけて僅かに傾斜しており、東端部と西端部の比高差は約 0.1mをはかる。

調査区の基本的な層序は、耕作層（1層）床土層（2層）搬入土（3層）旧耕作土（4層）旧床土層（5層）地山層（6層）と区分できる。

基本層序 表土層（1層）

現代の耕作土。にぶい黄褐色シルト層である。

床土層（2層）

暗褐色シルト層。1層の床土。やはり遺跡の覆土である。

搬入土層（3層）

昭和40年頃の土地改良時の搬入土。にぶい黄褐色シルト層である。厚さは西端部で10m、東端部では40mと後者が厚い。

旧耕作土層（4層）

土地改良直前まで活動していた水田の耕作土。上面には稲株痕も残存する。灰褐色シルト層で、東側に向けて緩やかに傾斜する。遺物をわずかに含む。

旧床土層（5層）

4層の床土。黒褐色シルトである。やはり遺物をわずかに含む。

地山層（6層）

遺跡の地山層。灰黄色シルトで堅く締まる。なお、今回の調査区では、この上面で遺構を検出している。

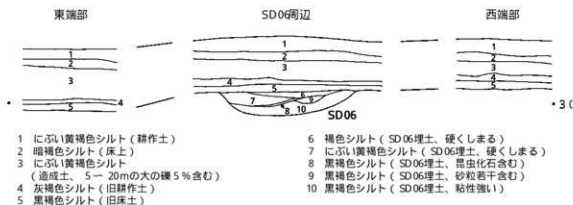


図3 調査区南壁層序（140）

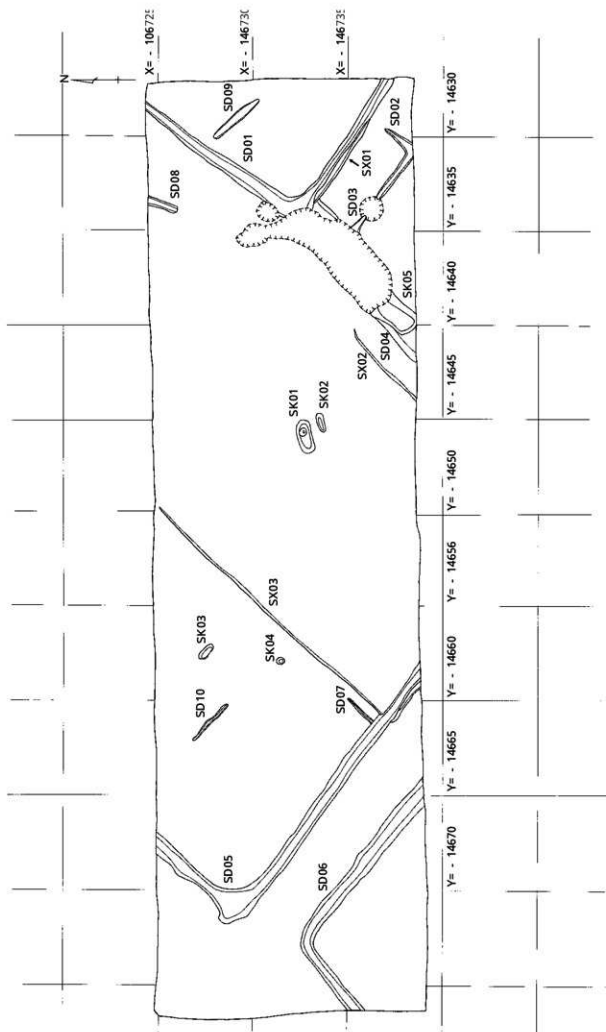


図4 遺構図 (1 200)

2 遺 構

今回の調査では、土坑 5基、溝 10本を検出している。遺構の分布状況は希薄で、調査区の東部域と西部域に若干のまとまりが認められる。

土坑 (SK)

SK01 調査区中央で検出した。SK02と近接する。平面形は長径 18m、短径 0.8mの楕円形で、検出面からの深さは 0.4mとなる。埋土は、にぶい黄褐色シルト単一。出土遺物は確認できなかった。

SK02 調査区中央部で検出した。SK01と近接する。平面形は長径 10m、短径 0.4mの楕円形で、検出面からの深さは 0.1mとなる。埋土は、にぶい黄褐色シルト単一。出土遺物は確認できなかった。

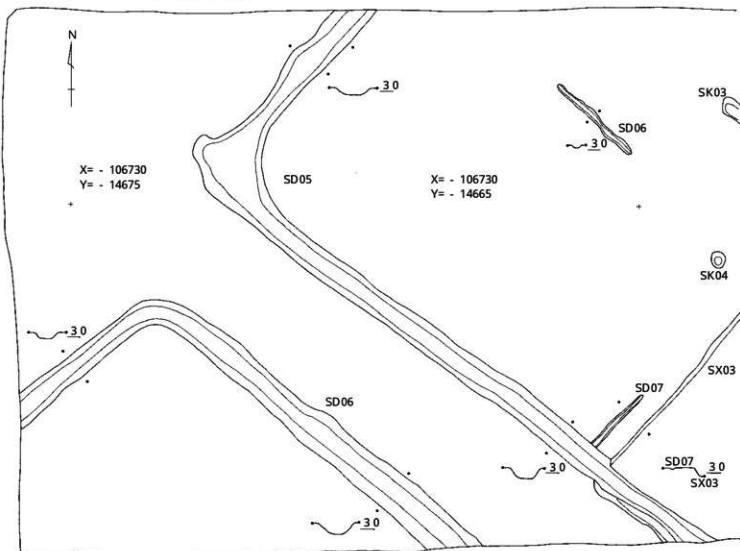


図5 東部集中域 (1 100)

調査区西部で検出した。SK04と近接する。平面形は長径 0.9m、短径 0.4mの楕円形で、
検出面からの深さは 0.2mとなる。埋土は、黄褐色シルト単一。出土遺物は確認できなかつた。

SK03

調査区中央部分で検出した。SD 1Cを挟んでSK03と近接する。平面形は直径 0.4mの円
形で、検出面からの深さは 0.1mとなる。埋土は、黒褐色シルト単一。出土遺物は確認で
きなかった。

SK04

調査区東部で検出した。土坑とするにはやや細長い形状であるが、一応これに含めた。
SD04とほぼ重なり、これを切る。平面形は隅丸方形を呈するの。北東部が攪乱により
破壊される。短径は 1.9m、検出面からの深さは 0.3mとなる。埋土は、明褐色シルト単一。
出土遺物は確認できなかった。

SK05

溝 (SD)

調査区東部で全長約 18mを検出した。幅は 0.6m、検出面からの深さは 0.2mとなる。北
東端と南東端は調査区外に至る。主軸は E - 35 - S。北東から直角に屈曲し、SX0と同
一方向に伸びる。屈曲部ではSD04と接するが、SX0や攪乱によりこれが破壊され、前後
関係は明らかにはできなかった。埋土は、黒褐色シルト単一。出土遺物には、灰系土陶器
の椀・小皿、施釉陶器のスリ鉢、土師器の羽釜等がある。

SD01

調査区東部で全長約 5mを検出した。幅は 0.4m、検出面からの深さは 5cmとなる。屈
曲部は一部が調査区外となる。溝の残欠で、北東から直角に屈曲して南西とへ伸びる。主
軸は北東部が N - 33 - E、南西部が E - 36 - S。北西端は攪乱により破壊され、同一軸
線上にはSD03が存在する。これと同一の遺構と考えるべきか。埋土は、灰褐色シルト単一。
出土遺物は確認できなかった。

SD02

調査区東部で全長約 1mを検出した。幅は 0.4m、検出面からの深さは 5cmとなる。や
はり溝の残欠で、主軸は E - 36 - S。両端は攪乱により破壊される。SD02と規模、形状
が類似する。同一遺構と考えるべきか。埋土は、灰褐色シルト単一。出土遺物は確認で
きなかった。

SD03

調査区東部で全長約 10mを検出した。幅は 1.6m、検出面からの深さは 0.3mとなる。南
西端は調査区外。主軸は N - 46 - E。南西部の一部を残して、部分攪乱とSK09に
より大きく挟られている。北西部ではSD01と接するが、この部分もSX0により破壊され、前後
関係は明らかにはできなかった。埋土は灰褐色シルト単一。出土遺物には図示した土師器の
ホウロクがある。

SD04

調査区西部で全長約 26mを検出した。幅は 0.8m、検出面からの深さは 0.2mとなる。北
東端と南東端は調査区外。北東から直角に屈曲して南東とへ伸びる。主軸は北東部が N -
4f - W。南西部が E - 35 - S。溝幅は屈曲部でやや広くなる。南東部はSD06と平行する。
また、SD 17の南西部と重なるが、前後関係を確認することはできなかった。なお、南東
部はSX0により破壊される。埋土は黒褐色シルト単一。出土遺物には、土師器鍋の小片
がある。

SD05

- SD06 調査区西部で全長約14mを検出した。幅は0.8m、検出面からの深さは0.2mとなる。南西端と南東端は調査区外。北東から直角に屈曲して南東へと伸びる。主軸は北東部がN - S1 - E、南東部がE - 39 - S。南東部はSD05と平行する。埋土は、図2に表現するが、8層からは昆虫化石が得られた。詳細は第 章に記す。出土物には灰釉系陶器の椀、施釉陶器片のほか、図示した施釉陶器の天目椀、フイゴもしくはトリベがある。
- SD07 調査区西部で全長19mを検出した。溝の残欠で、幅は0.2m、検出面からの深さは2cmとなる。主軸はN - 44 - E。SX03と平行する。南西部はSD05とほぼ直角に接するが、前後関係を確認することはできなかった。埋土は黒褐色シルト単一。出土物は確認できなかった。

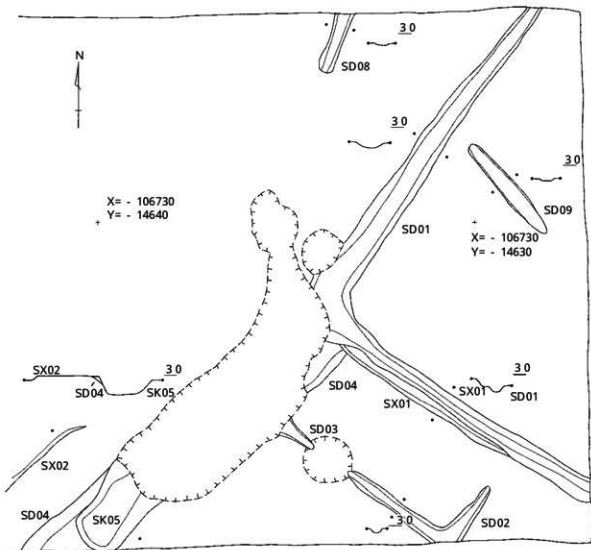


図6 西部集中城 (1 100)

調査区東部で全長 17mを検出した。溝の残欠で、幅は 0.4m、検出面からの深さは 5cm となる。北西部は調査区外。主軸は N - 18 - E。埋土は褐灰色シルト単一。出土遺物は確認できなかった。

SD08

調査区東部で全長 31mを検出した。溝の残欠で、幅は 0.8m、検出面からの深さは 3cm となる。主軸は E - 5f - S で、他遺構のそれとは若干異なる。埋土はにぶい黄褐色シルト単一。出土遺物は確認できなかった。

SD09

調査区西部で全長 26mを検出した。溝の残欠で、幅は 0.2m、検出面からの深さは 3cm となる。主軸は E - 42 - S。埋土は黒褐色シルト単一。出土遺物は確認できなかった。

SD10

地山層の削平による段 (SX)

調査区東部で全長 59mを検出した。主軸は E - 33 - S。SD 01の北西-南西ラインの南側に存在する。段差は 0.2m前後。SD 04の北東部を破壊する。時期は特定できなかった。

SX01

調査区東部で全長 5mを検出した。主軸は N - 45 - E。SD 04の西側でこれとほぼ並行に存在する。段差は 5cm前後。南西部で調査区外となる。時期は特定できなかった。

SX02

調査区東部で全長 19mを検出した。北西から屈曲し南東部で調査区外となる。主軸は北東部が N - 40 - E、南東部が E - 35 - S。段差は 0.2m前後。SD 05を南東方向に 12m平行移動した位置に存在するが、重複部分ではこれを破壊する。時期は特定できなかった。

SX03



第 章 遺 物

出土遺物の総量は、コンテナ 1箱にすぎない。遺構に伴う資料も乏しく、大半が包含層中資料となる。内訳は、土器・陶磁器類がそのほとんどを占め、若干の瓦類小片がこれに加わる。土器・陶磁器類の種類としては、灰釉系陶器、近世陶磁器がある。

1～4はSD0資料。1、2は灰釉系陶器。1は椀底部片。低くつぶれる高台を持つ。高台にはモミガラ圧痕が確認できる。2は小皿。底部の小片。底部は、僅かに突出する。3は施釉陶器。スリ鉢の体部片。4は土師器。羽釜の鏝部片。鏝部下方の外面にはススが附着する。ローリングが著しい。

5はSD0資料。土師器で、ホウロクの口縁部片。極小片で、外面にはススが附着する。

6、7はSD0資料。6はフィゴの羽口もしくはトリベの口縁部片。器面に滓が付着する。7は施釉陶器天目鉢。口縁部の極小片。8は土師器。いわゆる茶釜型羽釜。口縁部の極小片である。9は灰釉系陶器の小皿。底部は、僅かに突出する。焼成不良品で、内面と、外面の一部に他製品が附着する。

10～21は遺構に伴わない資料をまとめた。10～12は施釉陶器。いずれもスリ鉢で、10、11は口縁部片。12は体部片。13～16は肥前系磁器。江戸中期～後期。13は椀。口縁部片。14は蓋か。やはり口縁部片。外面に青磁釉を施す。15は椀の体部片。16は鶯猪口か。17～20は瀬戸系磁器。江戸後期で、いずれも椀。21は瀬戸系陶器。蓋でつまみを持つ形状。江戸後期。外面に灰釉を施す。

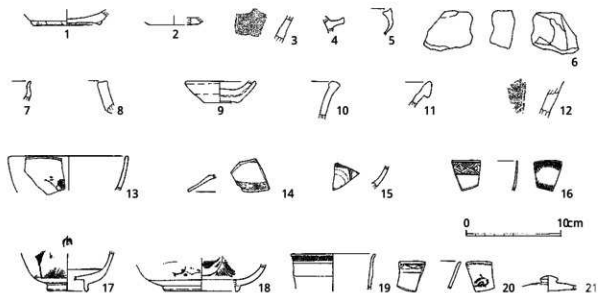


図7 遺物実測図(14)

第 章 まとめ

今回の調査区は、大脳城遺跡としては 8 番目に当たる。以前の調査は、前述のように平成 8～9 年度に本センターによって実施され、すでにその報告書も刊行されている（北村 1999）。なお、報告書では、大脳城遺跡を Ⅰ 期の三時期に区分して理解している。年代的には、Ⅰ 期が 19 世紀後半から 16 世紀後葉、Ⅱ 期が 17 世紀初頭から 17 世紀後葉、Ⅲ 期が 18 世紀後葉から 19 世紀中葉にそれぞれ該当する。

以下、報告書により各時期を概観する。

Ⅰ 期の遺構群は、遺跡の名称にもなっている大脳城（伝槻川五左衛門屋敷）とそれに関連した遺構群と考えられている。具体的には、97B 区で確認された区画を中心として、周囲に屋敷地が展開する景観が想定されている。96A～D 区をジグザグに貫く溝は、外濠と推定されるもので、これより北側には遺構の希薄なエリアが展開するとされる。

大脳城

Ⅱ 期の遺構群は、前段階の遺構群が廃絶後に、16 世紀末～17 世紀初頭に及びぶ空白期を挟んで登場する。これらは、前段階の区画を基本的に継承するが、大脳城との有機的な関連性はなく、旧大脳村に関連する遺構群と推定されている。また、史料の分析によれば、旧大脳村は承応三年（1654 年）から元禄十一年（1698 年）頃に、現在地へと移転した可能性が高く、Ⅱ 期遺構群の動向とよく一致するとも指摘されている。

大脳村

Ⅲ 期の遺構群は、旧大脳村移転後に展開する遺構群である。やはり、前段階の区画を形體的に継承する。遺構の分布状況は希薄で、出土遺物の量も減少することなどから、報告者は屋敷地よりむしろ耕作地等の土地利用を想定している。

次に、今回の調査成果を、これらと比較する。

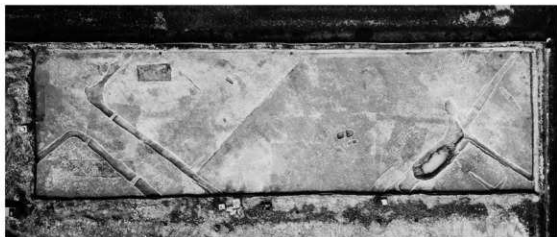


図 8 調査区航空写真

調査成果 今回検出できた遺構は、溝を中心とするもので、ほとんどが 期に属するものと考えられる。具体的性格は判然としないが、溝については北東—南西方向、あるいはこれに直交した主軸方向をとることが特徴的となっている。なお、こうした状況は、近接する96D区とも類似している。このことを評価すると、同様のエリアが周辺部において広域に展開している可能性も考えられる。

今回の調査区は、期以前に属する遺構が確認されていない。また、この時期の出土遺物も乏しい状況にある。遺構の分布範囲が、期段階で新たに今回の調査区周辺にまで拡大した結果であろうか。

こうした情報に、報告書の指摘する 期遺構群を耕作地とする意見を加えると、江戸時代頃に各地で見られる可耕地開発との関連を考えることもできる。そして、この段階の区画が、若干の変更を受けながらも、土地改良以前の地割りとして近年まで残存していたのであろうか。

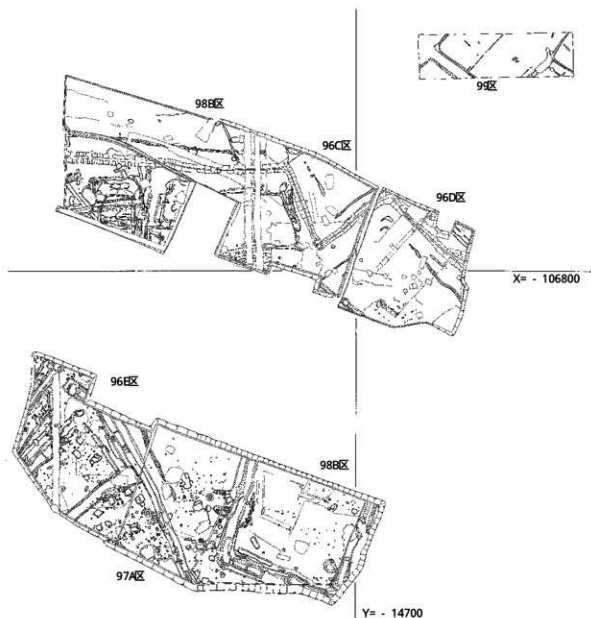


图9 調査地区全体图

第 章 付 載

大脳城遺跡から産出した昆虫群集について

森 勇一(愛知県立明和高等学校)

1. はじめに

2005年開催の愛知万博会場予定地は、里山の景観を今日にとどめた貴重な自然として注目されている。本報告に述べる大脳城遺跡は愛知県豊明市栄町に所在し、一見、万博予定地とは何ら関係ないようにみえる。豊明市と、万博予定地の瀬戸市「海上の森」との直線距離は約20km、もう一つの会場として想定されている「愛知青少年公園」がある長久手町ではその距離約15kmであり、意外に近い。そればかりか、三者はいずれも丘陵地を構成する地層が東海層群と呼ばれる鮮新・更新統から成っており、地質のうえでも地形のうえでも共通点が多い。地層や地形が似かよっており、距離もそれほど離れていないとすれば、おのずとそこに生息する動植物もよく似たものなることが予想される。

大脳城は中世末に存在した城跡であるが、この溝の中からどんな昆虫が産出するかは、中近世のころの大脳城周辺やそのバックグラウンドとなった里山の自然を考察するのに重要である。小論では、昆虫化石の分析結果を通じて、中近世のころの人の営みと自然との関係について述べ、里山の自然はどうあるべきかの資料としたい。

2. 試料および分析方法

大脳城遺跡は、国道2号線(名四国道)沿いの境川水系の正戸川右岸に位置している。現在の標高は約35mであり、豊明市内では最も低いところにあたる。地形的には沖積面上に位置しているように見えるが、遺跡調査地点における地層断面の観察結果から、本遺跡の立地する基盤層は明らかに更新世の段丘堆積物であり、その後(西部)には東海層群より成る丘陵地が分布している。

昆虫分析試料は99調査区のSD06とされる幅0.8m、深さ約0.2mの溝堆積物から産出したものである。考古遺物から本試料を含む地層は17世紀初頭～17世紀後葉(期)が、18世紀後葉～19世紀中葉(期)のものとしてされている。歴史上では、期が江戸時代前期、期が幕末から明治にかけてのころと推定されている。

昆虫分析用に採取された分析試料の湿潤重量は19.5gであり、本報告ではその1/2にあたる約10gについて調査した。なお、残る9.5gは豊明市教育委員会に提供し、社会教育の一環として地元大脳区の子供会の皆さんと筆者との共同作業によって、昆虫化石の抽出や計数などを行う予定である。

昆虫化石の同定は、筆者採集の現生標本と実顕微鏡下で1点ずつ比較のうえ実施した。なお、昆虫化石は、いずれも節片に分離した状態で検出されており、そのため、本論に記した産出点数は、昆虫の個体数を示したものではない。

3. 昆虫群集

分析試料より抽出された昆虫化石は、計606点であった(表1)。なお、産出昆虫の主なものについては、図版1に実体顕微鏡写真を掲げた。

昆虫群集は、陸生の食植性昆虫を主体に、主に乾燥した地表面上に生息する地表性歩行虫で構成され、水生昆虫の出現率はきわめて低率であった。産出昆虫のうち、水生昆虫はわずか9点(1.9%)と少なく、地表性歩行虫は66点(10.9%)うち食糞性昆虫は計15点(2.9%)であった。陸生の食植性昆虫は計502点(83.7%)検出され、過半を占めた。これ以外に、主に植物上において食肉性のテントウムシ科 *Coccinellidae*(1点)やカメムシ目 *Hemiptera*(2点)、地表性で雑食性のアリ科が計10点、双翅目 *Diptera*が3点検出され、また所属不明の甲虫目が13点確認された。

種組成では、食植性昆虫のヒメコガネ *Anomala rubicuprea*が鞘翅 *Elytra*(139点)・前胸背板 *Pronotum*(52点)、腿脛節 *Legs*(45点)などを中心に、計264点(43.6%)と多産した。食植性昆虫では、これにドウガネブイブイ *A. cuprea*(49点)、クロコガネ *Holbrichia kibensis*(49点)、ノコギリカミキリ *Prionus insularis*(23点)およびアオドウガネ *A. abopibsa*(12点)、マメコガネ *Popillia japonica*(12点)、スジコガネ *M. inala testaceipes*(6点)などが伴われた。

地表性歩行虫では、属および種名が未同定のオサムシ科 *Carabidae*が計1点産出した。攪乱地表面の指標種(石谷、1996)とされ畑作地に多い食肉性のセアカヒラタゴミムシ *Dolichus halensis*が計3点見いだされた。また、主に水田地帯や湿地・水たまりなどの湿潤地表面上に生息するヒラタゴミムシ族 *Platynini* ツヤヒラタゴミムシ *Synuchus* sp.、トックリゴミムシ属 *Lachnoceps* sp.、ミスギワゴミムシ属 *Bembidion* sp.などが認められた。湿潤地表面上に多く、食肉性ないしときに食植性の地表性歩行虫であるハネカクシ科 *Staphylinidae*が多産し、また食糞性甲虫の代表種であるコブマルエンマコガネ *Onthophagus atripennis*、エンマコガネ属 *Onthophagus* sp.、オオマグソコガネ *Aphodius haroldianus*、マグソコガネ *A. rectus*なども低率ながら産出した。

水生昆虫では、湿地や水たまりなど多いコガムシ *Hydrochara affinis*(2点)、ヒメガムシ *Sternophorus rufipes*(1点)に加え、これまで日本各地の水田層中より多数確認され、水田指標昆虫として知られるセルガムシ *Coebstma stultum*(1点)・ガムシ *Hydrophilus acuminatus*(1点)などの食植性の水生昆虫が計5点検出され、食肉性の水生甲虫であるゲンゴロウ科 *Dytiscidae*が4点確認された。

なお、96調査区の溝堆積物より多産したクロオオアリ *Camponotus japonicus*は6点と少なく、アリ科 *Formicidae*全体でも計10点産出したのみであった。

4. 考察

(1) 里山の自然

2007年初夏、愛知万博の予定地とされる「海上の森」を訪れた。昆虫相の観点から、まずは、その第一印象について述べてみよう。海上の森では、この時期の里山の風物詩ともいえるハルゼミ

*Terpnosia vacus*の鳴き声が聞こえない。

道路上に異常とも思えるほど、地表性歩行虫が多い。クロカタビロオサムシ *Cabsoma maxinowiczii* ミカワオサムシ *Carabus arrowianus* ハンミョウ *Cicindela chinensis japonica* ニワハンミョウ *C. japona* クロシデムシ *Nicrophorus concobiri*などがしきりに徘徊している。道路ぎわの植物には、まったくと言ってよいほど葉っぱがない。植物に葉っぱがなく茎だらけになっているのは、鱗翅目の幼虫に食べ尽くされていたからなのだ。鱗翅目の幼虫は植物の葉を食べ、それでも足りないため木の上にぶら下がってエサを求めているうちに落下し、道路上にうごめくことになる。これをオサムシ類がむさぼり食うという奇妙な食物連鎖が成立している。

鱗翅目の異常発生は、かれらを養うはずだった植物を枯死させ、やがて鱗翅目そのものの生存をも危うくしている。鱗翅目幼虫の多さは異常であり、その原因の一つは昆虫食の鳥類が少ないからだと思われた。海上の森にハルゼミが鳴いていないのは、この林にはヒノキやスギの植林はあっても、里山につきもののアカマツがほとんど生えていないのだ。このように、海上の森における「里山の自然」は、何とも不思議な里山林といえる。

(2) 大脳城遺跡周辺の古環境

大脳城遺跡産出の昆虫化石では、植物に依存する昆虫の種数が少なく総じて貧弱なものといえる。このため、大脳城遺跡をめぐる当時の植生は限られたものだけだった可能性が高い。分析試料中で最も目だったのは、緑色の金属光沢を有するヒメコガネの体節片であった。本種は、元来林縁や二次林などの落葉広葉樹の樹葉に依存して生活していた広食性の食葉性昆虫とされるが、人為による植生改変や畑作物などの出現に伴って食性転換し、多くの栽培植物を食害するようになったといわれる。ヒメコガネは、ダイズやアズキをはじめとしたマメ科植物や、クリ・ブドウなどの果樹を加害する畑作有害昆虫として著名であり（湯浅・河田、1952；日本応用動物昆虫学会編、1987）、成虫が葉を、幼虫が主に根を食害する。台地や扇状地などに多く発生し、沖積低地では比較的少くまた山間地でも生息密度が低いという（桑山、1953）。大脳城遺跡におけるヒメコガネの多産から、本遺跡周辺に畑作地や人間の介在した二次林（里山林）が成立していたことは容易に推定できる。本種以外に、マメ類やカキ・ブドウなどの畑作物を加害するドウガネブイブイやマメコガネ、サクラコガネなどの畑作害虫が伴われることも、こうした推定を補強するものであろう。

次に本群集を特徴づける食植性昆虫として、スジコガネ・クロコガネ・ノコギリカミキリの存在をあげることができる。いずれも東海地方における里山の指標種として重要であり、アカマツの生える里山に最も普通に認められる。これらの昆虫は、盛夏のころ、周囲に里山林を有する場所で灯火トラップをかければ、前述のヒメコガネと並んで必ずといってよいほど採集できる甲虫の仲間である。現在の豊明市でも、3分類群は普通種として市内各所に分布している。このうち、スジコガネは食葉性のコガネムシ科としては珍しくアカマツの葉を食害し、クロコガネやノコギリカミキリはアカマツを直接加害しないもののアカマツが繁茂するような里山林に生息する昆虫である。大脳城遺跡西方の丘陵地にアカマツが生えていたことは確かなことだ。

地表性歩行虫では、畑作地や乾燥地表面に多いセアカヒラタゴミムシやマルガタゴミムシ属 *Amara* spが確認され、人為度の高い地表面上に多いコブマルエンマコガネ・オオマグソコガネ・マグソコ

ガネ・オオヒラタシテムシ *Eusiphia japonica*などの糞虫類や食屍性昆虫も低率ながら認められた。そのため、昆虫化石を産出した区画溝付近に畑作地が存在したことが地表性歩行虫からも指示される。食糞ないし食屍性昆虫の出現率からすると、昆虫分析を含有する区画溝の周りの人為汚染はきわめて軽微だったと考えられる。水生昆虫の少なさからは、溝の水深は浅く水につかった時間も著しく短かったと考えてよいだろう。

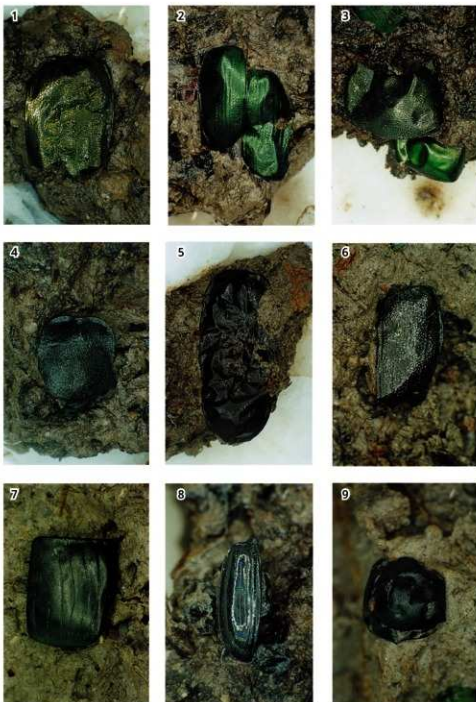
中世から近世にかけ、人家周辺に存在した里山では、人々が燃料材や暖房用などのほか農地に踏み込む緑肥として、落ち葉・下草・小枝などありとあらゆる有用資源を奪い去り、これが原因で里山林が著しく疲弊していたらしいことは、森（1999）に述べたとおりである。林内は明るく見渡しがよいので、そこに生育する動植物は種数・個体数ともに著しく少なかった。地力の衰えた林床からは大雨のたびごとに、土砂が大量に流亡していたことだろう。このような荒廃した丘陵地に生育できる木本は、唯一アカマツのみだった（只木、1990）。明治初年のころの絵図を見ると、人家周辺の丘陵地では日本各地至るところげ山になっていて、そこにはアカマツと推定される木が描かれている（田端、1997）。明治中期の桶狭間古戦場（中日新聞社撮影）にはマツ以外の木は写っておらず、丘陵上の表土はむき出しになっている（川瀬、1997）。

こうした文献資料と照らしてみると、大脳城遺跡の区画溝から得られた昆虫群集にアカマツ由来の昆虫化石が含まれ、またヒメコガネをはじめ畑作物を加害する食植性昆虫を多産する事実から、溝堆積物がたまった時代は幕末から明治のころと考えるのが妥当であろう。改めて、この時期の里山林における人の収奪の大きさに驚かされる。

文中に述べた「海上の森」の生物相は、大脳城遺跡の分析結果が示すように近隣の歴史時代の里山林とは比較にならないほどすぐれている。が、しかし、その生態系もまたどこか病んでいる。開発を前に、現状の自然を正しく記録にとどめておくことは、20世紀を生きた人類の責務であるように思う。

文 献

- 石谷正字（1996）環境指標としてのゴミシ類 甲虫目：オサムシ科、ホソクビゴミシ科）に関する生態学的研究、比和科学博物館研究報告、34、1110。
- 川瀬久美子（1997）第4章（第1節）市政施行当時の自然、新修名古屋史（第8巻）自然編、新修名古屋史編集委員会、240-251。
- 桑山 寛（1953）日本における大豆害虫の分布と害相・養賢堂、129p。
- 森 勇一（1999）愛知県大脳城遺跡から産出した昆虫群集と古環境、愛知県埋蔵文化財センター調査報告書（第8巻）大脳城遺跡、愛知県埋蔵文化財センター、203-208。
- 日本応用動物昆虫学会編（1987）農林有害動物・昆虫名鑑、日本植物防疫協会、379p。
- 田端英雄（1997）里山の自然（エコロジーガイド）、保育社、199p。
- 只木良也（1990）マツ林盛衰記・マツ林と人の不思議な関係、樹の日本史（シリーズ自然と人間の日本史4）、新人物往来社、102-112。
- 湯浅啓温・河田 薫（1952）予防防除・農作害虫新説、朝倉書店、491p。



- | | |
|--|---|
| 1. ドウガネブイブイ <i>Anomala cuprea</i> Hope
右上翅 長さ 10.0mm (99区 SD 06; 標本 183) | 6. クロコガネ <i>Hobriotha kibbensis</i> Brenske
右上翅 長さ 6.4mm (99区 SD 06; 標本 579) |
| 2. ヒメコガネ <i>Anomala rubicuprea</i> M otshulsky
右上翅 長さ 9.5mm (99区 SD 06; 標本 212) | 7. エンマムシ <i>Merothier jkei</i> M arseul
右上翅 長さ 5.4mm (99区 SD 06; 標本 280) |
| 3. アオドウガネ <i>Anomala abopisai</i> Hope
前胸背板 長さ 5.0mm (99区 SD 06; 標本 253)
右下はヒメコガネの前胸背板 | 8. ミズギワゴミムシ属 <i>Bembitris</i> sp
左上翅 長さ 2.9mm (99区 SD 06; 標本 66) |
| 4. クロコガネ <i>Hobriotha kibbensis</i> Brenske
頭 部 長さ 4.5mm (99区 SD 06; 標本 160) | 9. クロオアリ <i>Camponotus japonicus</i> M ayr
頭 部 長さ 3.2mm (99区 SD 06; 標本 148) |
| 5. ノコギリカミキリ <i>Priemus insularis</i> M otshulsky
右上翅 長さ 22.0mm (99区 SD 06; 標本 5) | |

昆虫化石の顕微鏡写真

大蔵城跡遺跡から産出した昆虫化石

分類	和名	学名	99×SD06埋土(19.5kg)										小計			
			検出部位													
			H	S	P	E	T	A	L	C	O					
水生	ゲンゴウ科	Dytiscidae			1	3									4	4
	ガムシ	<i>Hydrophilus acuminatus</i> Motschulsky									1				1	
	コガムシ	<i>Hydrochara affinis</i> (Sharp)										2			2	
	ニメガムシ	<i>Normatophus rufipes</i> (Fabricius)	1												1	
	セマルガムシ	<i>Carcharias strabus</i> (Walker)				1	1				2	3			7	
変異性	エンマコガムシ属	<i>Orthopagus</i> sp.				1									1	
	コアマルエンマコガムシ	<i>Orthopagus atripennis</i> Waterhouse				1	1								2	
	オオマヅコガムシ	<i>Ambodius barolifera</i> Balduzzi				1	1								2	
	マヅコガムシ	<i>Ambodius rectus</i> (Motschulsky)				1	1								2	15
	エンマムシ	<i>Megastylus reticulatus</i> (Marseul)				1	1								2	
	エンマムシ科	Megastylidae				1	1								2	
	オオマヅコガムシ	<i>Gambusia japonica</i> (Motschulsky)				1	2								3	
	オオムシ科	Carabidae	3			5	1	2							11	
	アオゴムシ属	<i>Chalcidius</i> sp.				1									1	
	アトキリゴムシ科	Labiinae					1								1	
変異性	ツマヤクダモノシ属	<i>Smaculax</i> sp.				7									7	
	ツマヤクダモノシ属	<i>Lachryosmia</i> sp.				3									3	
	ヒメツクダモノシ属	<i>Platyrini</i>				1									1	
	ヒメツクダモノシ属	<i>Bombidus</i> sp.				3									3	
	マルガタゴムシ属	<i>Amara</i> sp.				5									5	
	セアオビツクダモノシ	<i>Dactylus helenae</i> (Schubler)				3									3	
	ナガヒメツクダモノシ	<i>Scaphisoma ferricola pacificus</i> Bates	1			1									2	
	ヤマトツクダモノシ	<i>Lachnocyrtus japonica</i> Bates				1									1	
	キマツクダモノシ	<i>Pterostichus</i> sp.				1									1	
	ハチカクダモノシ科	Staphylinidae	1	4	8			2							15	
	シロムシ科	Scutellaridae	1	2	4			2	3						12	
	シロムシ科	<i>Anomalis</i> sp.	4	2	7	1	2	19							35	
	シロムシ科	<i>Anomalis dimidiata</i> Herbst	1		3										4	
	シロムシ科	<i>Anomalis sylvatica</i> Hope			1	16	15	1	6	7					46	
	シロムシ科	<i>Anomalis subopacata</i> Motschulsky	2		10										12	
シロムシ科	<i>Anomalis amida</i> Lewis	10	1	52	130	8	10	45						264		
シロムシ科	<i>Pogonites japonica</i> Newman				1									1		
シロムシ科	<i>Mimela</i> sp.				2	2	4	4						12		
シロムシ科	<i>Mimela ruficornis</i> Motschulsky				6									6		
シロムシ科	<i>Mimela sibirica</i> Gyllenhal				2			1						3		
シロムシ科	<i>Melolontha lamella</i> Nomura				2									2		
シロムシ科	<i>Melolontha japonica</i> Brancato	3	5	10	1	4	24							49		
シロムシ科	<i>Abombardus</i> sp.				1		1							2		
シロムシ科	<i>Abombardus japonica</i> Hope				1		1		1					3		
シロムシ科	<i>Abombardus sinicolor</i> Motschulsky				1		1							2		
シロムシ科	Coranichidae										1			1		
シロムシ科	<i>Ethopyga insularis</i> Motachi sky				1	16		2	4					23		
シロムシ科	Leucanidae				2									2		
シロムシ科	Platycidae				1	3	8	1						13		
シロムシ科	Chrysomelidae										1			1		
シロムシ科	Cicadellidae				1	4		1						6		
シロムシ科	Cixyidae													1		
シロムシ科	Hemiptera								2					2		
シロムシ科	Formicidae				4									4		
シロムシ科	<i>Camponotus japonicus</i> Mayr				6									6		
シロムシ科	Diptera										3			3		
シロムシ科	Colaptes				2	1		1	2					7	13	
シロムシ科	その他															
小計			39	3	118	261	17	40	118	3	7			606		

(脚注)

H:水生, S:変異性, A:Antenna, M:Marble, P:Person, S:Small, L:Large, T:Thorax, A:Abdomen, C:Cyathus, L:Leaf, O:Other

W:Wing, L:Leg, T:Thorax, A:Abdomen, C:Cyathus, L:Leaf, O:Other

遺跡から産出した昆虫化石

参考・引用文献

- 梅本博志他 1991 『中世城館調査報告』(尾張地区) 愛知県教育委員会
- 北村和宏他 1989 『大脳城遺跡』 財愛知県埋蔵文化財センター
- 坂倉澄夫 1998 『大脳城跡』 『愛知県埋蔵文化財情報』 13 平成 8年度
愛知県教育委員会・財愛知県埋蔵文化財センター
- 坂倉澄夫他 1997 『大脳城跡』 『年報』 平成 8年度 財愛知県埋蔵文化財センター
- 竹内 睦 2000 『大脳城遺跡』 『年報』 平成 11年度 財愛知県埋蔵文化財センター
- 中野良法 1997a 『大脳城跡』 『埋蔵文化財愛知』 48 財愛知県埋蔵文化財センター
- 1997b 『大脳城跡』 『埋蔵文化財愛知』 50 財愛知県埋蔵文化財センター
- 1998 『大脳城跡』 『年報』 平成 9年度 財愛知県埋蔵文化財センター
- 福岡晃彦 1999 『大脳城範囲確認調査』 『年報』 平成 10年度 財愛知県埋蔵文化財センター
- 藤井孝之 1999 『大脳城遺跡』 『愛知県埋蔵文化財情報』 14 平成 9年度
愛知県教育委員会・(財)愛知県埋蔵文化財センター
- 愛知県教育委員会 1994 『愛知県遺跡地図』()尾張地区 愛知県教育委員会
- 大府市史編さん刊行委員会 1991 『大府市誌』 資料編考古 愛知県大府市
- 豊明市史編さん委員会 1993 『豊明市史』 本文編 愛知県豊明市役所



遺構計測一覧

土坑 (SK)

単位 m

遺構番号	長径	短径	深さ	備 考
SK01	18	08	04	
SK02	1	04	01	
SK03	09	04	02	
SK04	14	04	01	
SK05	-	15	03	

溝 (SD)

遺構番号	全長	幅	深さ	備 考
SD01	13	06	02	
SD02	5	04	005	
SD03	1	04	005	
SD04	10	16	003	
SD05	26	08	02	
SD06	14	08	02	
SD07	19	02	002	
SD08	17	04	005	
SD09	31	08	003	
SD10	26	02	003	

段状遺構 (SX)

遺構番号	全長	段差	備 考
SX01	55	02	
SX02	5	005	
SX03	19	02	

遺物計測一覧

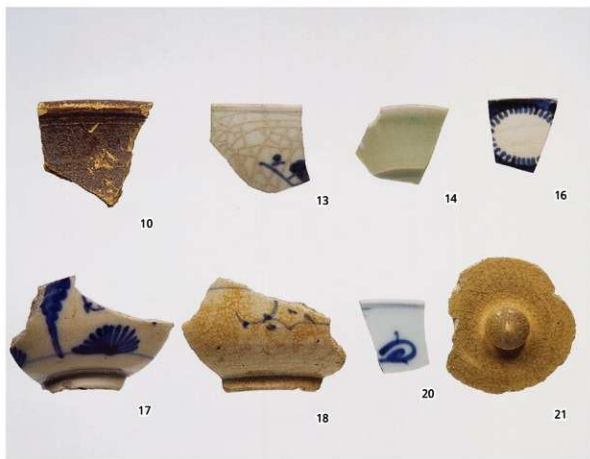
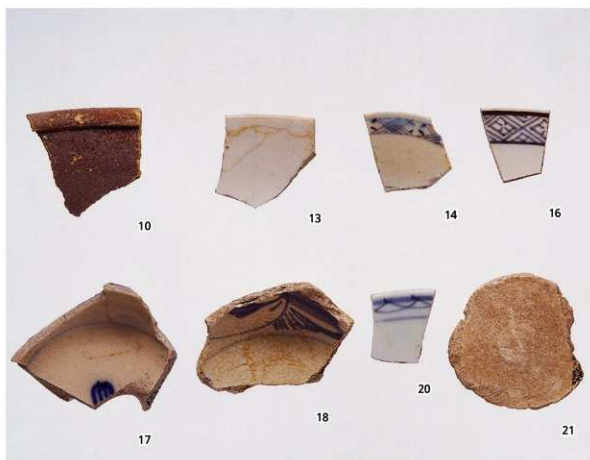
単位 cm

図板番号	登録番号	出土位置	種類	器種	口径	底径	器高	備 考
1	1	SD01	灰釉系陶器	椀	-	81	-	
2	2	SD01	灰釉系陶器	小皿	-	-	-	
3	3	SD01	施釉陶器	すり鉢	-	-	-	
4	4	SD01	土師器	羽釜	-	-	-	
5	5	SD04	土師器	ほうろく	-	-	-	
6	6	SD06	ファイゴ	羽口	-	-	-	
7	7	SD06	施釉陶器	天目椀	-	-	-	
8	8	表土	土師器	釜か	-	-	-	
9	9	表土	灰釉系陶器	小皿	72	35	22	
10	10	表土	施釉陶器	すり鉢	-	-	-	
11	11	表土	施釉陶器	すり鉢	-	-	-	
12	12	表土	施釉陶器	すり鉢	-	-	-	
13	13	表土	磁器	碗	-	-	-	
14	14	表土	磁器	蓋か	-	-	-	
15	15	表土	磁器	碗か	-	-	-	
16	16	表土	磁器	蕎猪口か	-	-	-	
17	17	表土	磁器	碗	-	38	-	
18	18	表土	磁器	碗	-	-	-	
19	19	表土	磁器	碗	-	87	-	
20	20	表土	磁器	碗	-	-	-	
21	21	表土	施釉陶器	蓋	-	-	-	

图版 1
调查区全景·西部集中域



图版 2
遺物



報告書抄録

ふりがな	おおわきじょういせき							
書名	大脇城遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第9集							
編集者名	池本正明・竹内睦・森勇一							
編集機関	財団法人愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター							
所在地	〒498 0017 愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方 802 24 TEL0567 67 4161							
発行年月日	西暦 1999年 8月 31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大脇城遺跡	愛知県豊明市 宋町 権田・ 元屋敷		12068	35 度 2 分 16 秒	137 度 0 分 21 秒	1999 4	750m ²	第二東海自動車道建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
大脇城遺跡	耕地・ 集落？	江戸時代（18 世紀後半）	溝・土坑		陶磁器（瀬戸・美濃、 肥前系）			

愛知県埋蔵文化センター調査報告書 第9巻

大 脇 城 遺 跡

2001年 8月 31日

編集発行 財団法人 愛知県教育サービスセンター
愛知県埋蔵文化財センター

印刷 株式会社クイックス